

全文連設立20周年記念講演会

「文化財の保護について」

公益財団法人徳川記念財団理事長 徳川 恒孝 先生

今日は、日本という国が今持っている文化財についての考え方や、世界中の国が自分の国の文化財にどのように心を注いでいるか、ということについてお話をしていきたいと思います。

**自国の歴史と文化を大切にしない国には、
どのような未来があるのか？**

私は学生時代に、ロンドンの英語の学校に2年間行っておりました。1クラスだいたい15人で、15か国籍、最初は基礎から始まり、最終的に高水準の完璧な英語を習得します。その2年日の授業で、各国の学生が自分の国の歴史と文化について、1人持ち時間2時間で話をするというもので、私がその時大変びっくりしたのは、各国の若者たちが、自分の国の歴史や文化を語り、いかに自国が素晴らしい国かということを力を込めて話をしたことです。この授業がありまして、私は非常に反省をすること大でした。

私は、昭和21年に小学校に入学しましたが、あまり日本の文化ということをお小・中学校で習った覚えがありません。歴史の時間というものは、年代を暗記することに8割ぐらい集中をしておりました。しかも、戦前から戦後へ教え方が変わってゆく時代で、縄文・弥生時代のところにももの凄い時間を取りまして、江戸時代の半ばぐらいで3学期がお終いという感じで、この頃に受けた歴史教育というのは、ある意味で偏ったものでした。

その私が二十歳になって、各国の同い年ぐらいの連中が、自国のことを本当に力を込めて熱弁している中、私はどうしたかと申しますと、それだけの知識などが無いものですから、図書館に行きまして、百科事典の“ジャパン”という項目を引きました。そうしますと、30～40頁に亘って日本の歴史と文化が詳細に載っておりました。これは有り難いと思い、それを一生懸命写しまして、私も力を込めて日本の話をいたしました。ひょっとすると彼らも図書館で自分の国を引いたのかもしま



せんが、本当に衝撃的な出来事でありました。

現在の日本の国の教育を見ておりましたが、歴史の教え方は、「一味散々：1333年鎌倉幕府崩壊」のように語呂合せの年号覚えに終始しています。子どもたちに聞きますと、歴史の授業って一番つまらないって言うんですね。これは実は非常に悲しい現実であり、もっと血湧き肉躍るような歴史を先生方に話していただけたらと思っています。

今朝も、ずっと選挙の演説を聞いておりましたが、けれども、只一人として日本の文化の話をした候補者はおられませんでしたね。日本という国が世界の国々の中で、歴史と文化に対して心を配っていない国のおそらくトップになっているのではないかと感じています。

◇ ロンドンの保存地域（古民家保存ブーム）

私が英語学校に通っていたのは今から53年前になりますが、その時住んでいたケンジントンという所に一昨年参りましたら、街並みが何一つ変わってないんです。石一つ動いてないのではないかとと思うぐらい変わっていません。ロンドンという都市は、どんどん新しいビルを建てていい地区と“絶対に手を触れてはいけない”という地区がありまして、私が住んでいたのはたまたま後者だったのですが、ホントに何も変わっていません。

ロンドンの人たちが、金持ちになって一番やりたいことは何かと言いますと、14～16世紀頃に建てられた古民家を買って、外観はそのまま藁葺

きの屋根で土の壁があって、丁度シェイクスピアの生家のようなほんとに古い建物で、中をすっかり改造して、近代的な居心地のいい家にする。外から見ると植木もたくさんあって古民家にしか見えない「僕の買ったこの家は一番古い建物である」という具合に自慢する。これが彼らの夢みたいなものなんですね。イギリスの金持ちは、そうやって古民家を大切にします。自動車なんかは当然よそに置いて、そこに置いたりしません。いろんな国によって考え方が違うと思いますが、「ロンドンの保存地域や古民家を自分で愛していく」という感覚が日本にはおそらくほとんどないのではないかなあと考えています。

ある古い街道筋に、素晴らしい家があるなあと、一年ぶりで通りましたら、門がすっかり取り払われていました。お家同様素晴らしい門だったので、地元の方に「あの門をもう見られないのは惜しいね」と言いましたら、そのお家の息子さんが大きなクルマを買って門を通れないので壊したという話で、たったそれだけなんです。ああいう門は、いま造ろうと思っても造れない。「道楽息子が自動車買って、壊してもいいのか！」これが、いま日本に起こっている現実なのだろうと思います。

◇ 第2次大戦後に数十年かけて復元された欧州の都市景観

第2次大戦で、特に徹底的に爆撃を受けたドイツの街は、今は戦前と変わらぬ景観に復元されていますが、崩れた石一つ一つに番号を付けて約25年かけて再建されたものです。爆撃で粉々になったものは入替えられています。ほとんどの石材は古いものを使って元どおりに戻して、内部のものも全て戻したと聞いています。あれだけ大きな影響を受けたドイツの都市ですが、昔ながらの場所を歩きますと、どう見ても17世紀そのままの佇まいにしか思えないほど元に戻っています。

私が言いたいことは、日本という国はこれだけ長い歴史を持っているにも拘わらず、そういった日本古来の文化、ずっと続いてきた素晴らしい建築物、これに対して何の配慮もしていない、世界の中で非常に珍しい国だと思いました。

◇ 100年以上の民家を保存するアメリカ

アメリカは、100年以上経った建築物は問答無用で保存です。州によって変わるかもしれませんが、ニューヨーク州はそうです。文化財になった

ものは取り壊すことができません。100年ですよ。アメリカではそれ以上昔にはそれほど大した歴史がないから100年ということになるのでしょうか。現在そういう方法を取っているということです。

いま、私たちの周りがある、300～500年経った名建築たちはどうするんだ、ということに関しては、何もかもとは言いませんが、非常に思いがいていない国だなあとというように思います。

◇ 中国の方針転換・儒教教育 嘘と本当と

中国も最近がらりと変わりました。私が最初に中国に行った時代はまだ、「批林批孔（林彪と孔子（又は周恩来）を批判・否定する思想）」の時代で、孔子は天下一の悪者で、孔子の像があるところは紅衛兵達がノミとカナヅチを持って、岩盤から全部削り取ったりして、ようやく解放に移った時代ぐらいです。本当の紅衛兵時代は知らないのですが、惨憺たる跡をたくさん見ました。孔子廟はそれはもうひどいことになっていました。

それから15年ぐらい経って行きますと、孔子廟はほとんど復活していました。私は、そこより少し南の方にある王陽明の墓をきれいにするために行ったのですが、孔子の墓がある所はみんな分かるんですけど、王陽明の墓はほとんど見捨てられて森の中にあるんです。実はそれを見つけたのは日本の九州の方で、その方たちと一緒に一生懸命敷を刈りました。それからまた5年ぐらい経って行きましたら、「王陽明の墓」と大きな標示がありました。その入口に観光客を迎える土産店がズラッと並んで、観光バスのための大きな駐車スペースもありました。その時一緒に行った方は、中国学専門の先生なんです。この土産屋を見ると、最近の中国の文化程度を非常に危惧します。これは北方様式の家ですよ。この土地の建物とは全然違う建物がたくさん並んでいます。これはまるで映画のセットの書き割りを慌てて作ったようなもので、南中国の古い建物に汚いペンキを振りかけたような、これはダメですね」とその中国の先生がおっしゃっていました。王陽明の墓がどうであろうが、日本人の観光客がたくさん来るかもしれないと思うと一気に中国風の建物を造って、いろんな物を売る。それを見て「ああ、今の中国の人はこんなに王陽明を尊敬しているのか」と思うと、それは大間違いで、陽明学を勉強をなさっているのでは全くなく、ひたすら日本の観光客からお金をいただきたいということになってい

たのが、今の王陽明の墓であります。

ただ、陽明学はあまり盛んではないのですが、儒教教育は中国では相当な勢いで戻ってきているようです。極一部ですが、学問を奨励するところあたりは、学校の教科書にも出てきたように言っております。それから唐の時代の、昔からある漢詩を子どもたちに教え始めた。というふうに変わってきているそうです。しかし、さっき申し上げた王陽明の墓の前のショッピングモールではありませんが、なんでも物が売ればいいという具合で、話半分に聞いておきます。中国がすっかり古くからの中国文明を愛する国になったと思うのは早合点になるだろうと思います。

◇ 自国の歴史に高い誇りを持つ世界中の人々

⇔ 歴史を教えない日本

このように自国の歴史に高い誇りを持つ世界中の人々に対して、歴史をあまり教えない日本ということが、日本にとってとても重たい問題として掛かって来ているんじゃないのかなあと感じています。歴史の一つひとつに善し悪しをつけるのではなく、その時代に起こったことを淡々と教えればよいわけであって、「これは悪である」、「これは善である」といったような歴史の教え方は、全く間違っていると思います。日本の歴史の教育は、異様に一つの視点から見たところのことしか教えてこなかったように思います。今ようやく東縛のようなものが無くなっているにも拘わらず、あまりきちんと歴史というものを教えていないということが、非常に残念なことです。外国の歴史の教育はたいていの国で、高校まで必修で、自国の歴史を教えるということが大きな教育の柱になっています。日本にはおそらくそれが無いということです。戦後70年近く経過した今、これまで育ってきた人々たちにとって問題が多いことだと思います。

◇ 相続税の無い国……WWF総会で感じたこと

私が日本支部の代表を務めるWWF（世界自然保護基金）という組織は、なかなか面白い団体で、元々はイギリスの王様などヨーロッパの王侯貴族が始めたものですから、大変な金持ちが多い、私の前2代ほどは銀行関係者がトップをやっていました。私が会長になったのは5年ほど前ですが、そこに来ているアジアの連中も、みんな大金持ちで、どうしてそんなに金があるのか、親から代々続いている財団があるのかと聞きますと、皆自分の財産だ

と言います。いろいろ聞いてみますと、相続税というものが無いんです。それに比べ、日本という国は、もの凄く相続税がきつい国なんですね。これは良し悪しで、金持ちのボンボンがカジノで大騒ぎするとか、そんな碌でもない子孫に遺産を渡すのは如何なものかと思う一方では、個人に財産があることによって、伝わるであろう文化、例えばお花を一筋にやっておられたり、お習字のうまいところもあれば、古今和歌集の歌を伝承してらっしゃるというように、いろんな文化があって継承しているお家がたくさんあるのに、相続税が重荷になってほとんど無くなりつつあります。

私が見ている70～80歳ぐらいの連中には辛うじて伝わっていても、その下の方々には何も伝わっていないお家が多いです。日本という国が益々のつぺらぼうになってしまうことが心配です。日本は、世界の中でとっても特殊な国であるということを確認いただきたいなと思ってこんなことをお話ししました。一番共産圏に近い民主国家という呼び方でもよろしいかと思えます。

島国の利点

連綿と続く歴史・他民族の武力襲来の無い日本

日本はご存じのように島国であり、力のある島国としては、イギリスと日本の2国が典型的であります。島国の良さというのは、入ってきた文化、文明がそのままそこにじっとあることですね。そこへ新しい文化がどこからか入ってくるとその上に乗っかっていく、また新しいものが入ると上へ上へというように、縄文の時代からずっと文化が重なっているのが今日の日本だと思います。

これが大陸だと、常に民族が動き回って古い文化を潰して、新しい文化が生まれる。例えばここにAという文明を持った人がどっと入ってきて、元の村・街を破壊し、また次のところに行ってしまう、そこには何も残らないで荒廃してしまう。やがて新しい文明が作られ発展する。そしてまたその文明を壊してしまう。というふう大陸文化は作って壊しての繰り返しです。

◇ 多層の歴史の蓄積……島国の特性

日本の文化の在り方は、大陸の文化の在り方とは違います。弥生時代のものが厳然と残っているところがあちこちにあります。特に日本が一番有り難いことは、他民族の武力による制圧というものに、一度も出くわしていないことですね。それが無い日本は多層の文化が蓄積されていくという

島国の独特の文化であります。非常に蓄積が進んできています。それは日本各地に残る城にも表れています。

◇ 民族対決 = 宗教戦争

民族絶滅の戦争……城郭の根本的な相違

ヨーロッパ・ユーラシア大陸の城というのは、都市を城壁で囲みます。何故かと言うと、大陸で起こる戦争というのは、基本的には民族皆殺し戦争です。Bという民族がCという民族を襲撃する、そして多くの場合、5歳以下の女子を除き、赤ちゃんでも男児であれば全員殺すというのが通常の在り方だったわけです。大陸の城というのは全部巨大なお城で、中に街がある。東京都の周り全部に城壁があるようなイメージで、街を守るというより民族を守るというのが彼らの城です。彼らはそういう戦争を3千年近く繰り返してきている人たちです。

一方、日本の城は、武家を守るため、城が開かれれば、たいがいの場合、武家の皆さんは自刃をしてお家が絶えるということでありまして、街はできるだけ焼かない。何故ならば、勝った方は自分がこの城に入った時にできるだけ早く自分の城下町を繁栄させたいですから、極力壊さないということです。ここに大陸と島国・日本との戦争が根底から違うということです。それが日本の文化というものが一つのもので繋がってきているということの証拠だと思えます。

◇ 文明の融和する日本の特色

もう一つ日本の面白いところは、文明が融和してくるんですね。諸外国では、キリスト教、イスラム教またその中でも4～5派に分裂して、抗争しているがこれには際限がありません。日本も最古の昔にはあったかもしれませんが、ほとんどないに等しい。仏教にもたくさん宗派がありますが、ある人が言うには、仏教という山は非常に大きいから、登山口は無数にあっつかまわれない、どの道を通っても辿り着く山はひとつですから。

こういう考え方が他の宗教にもあったならば、今まで世界で起こった戦争の半分は無くなるのではないかと思うぐらい感激しました。このような不思議な国は他にないというか、唯一正しい国だと、僕は思いました。

明治維新は文明開化か文明退化か

◇ 支配者階級が貧しくなった日本の文明……江戸時代の特色

日本の文明で特徴的なことは、なぜか支配者階級が貧しくなってゆくとということが江戸時代に起こっています。ある大学で7～8年、夏季に外国の学生達20名くらいに日本の歴史を講義するというので、江戸時代ってこういう時代で、平和が260年も続いてねって話をしておりました。お米だけに頼っていた武家が、社会全体に金融資本が出てきて、技術が進んで、そうするとお米頼りのお大名というのが段々貧乏になってくる。経済の力は全部市民階級の方に移ったが、高いモラルで武家は260年も続いたという話をしますと、これが学生たちには伝わらないんですよ。「武家は、法律を作り、裁判をする権限を持っていて、軍勢力や警察力を持っている。それなのに、どうして町民や農民の方が豊かになってきて、武家階級が没落するなんてあり得ない！」と言う学生がたくさんいました。実際には農村地区というのは自治が進んでるんだと説明しましたが、本当に不思議な時代だと彼らは考えていたようです。

ネパールで感じたこと

◇ 世界の多くの知識人が感じていること

7、8年前にネパールに行ったときのことで、昔の日本を思い出すような農村風景で、ガイドの青年も大変感じのよい大学生で、約束より多めに料金を渡しましたら、すごく喜んでくれて、これを何に使うのかと聞きましたら、インターネットカフェで世界の情報を見るのが無上の楽しみだと言うんです。そこでは何も申しませんでした。ネット上に映し出される華やかな部分にあこがれて、実際の人種差別や過重労働、治安の悪さなどが隠れている。それに気付かず、若者が故郷を去り農村が廃れていく。

まさしくインターネットが世界を壊していくということです。情報の垂流しで、これほど無責任なものはない。これ以上進めば間違いなく世界は戦争の時代に突入する可能性が高いことは、誰もが認識できる。人類滅亡です。でも、これを止めることは誰にもできない。

地球はこれ以上の人口を養えない？

私はWWFで、環境問題に関わっている関係でどうしても話しておきたいのは、1960年頃の人口は30億人でした。2011年11月で70億人になり、40年後にはおそらく100億人を超えます。私はいないでしょうが、子どもや孫たちは生活しています。そのころはもっと医学が進んで、薬も良い

ですから、100億人の内おじいさん・おばあさんの比率が非常に高い、これは日本を含め、人類にとって、とても大きな問題として、問いかけてられています。

資源不足、食糧難、温暖化といった問題や次々に絶滅してゆく野生の生物たち、田圃でよく見かけたゲンゴロウも絶滅危惧種になり、ほとんど姿を見ません。また、水不足も今後世界中で問題になる兆しです。人口が100億人になる、資源が不足する、高齢化が進む、これは大変困ったことで、間違いなく世界にやってくる問題です。このような事態にどう対処すればよいかということで、最後の項にかかってきます。

再び質素儉約の時代へ

人類存続の唯一の方策

江戸時代というのはたいへん面白い時代で、260年間平和が続く素晴らしい時代だった。最初の100年は、まさにバブルに向かって上がっていきます。紀伊國屋なんかが大盤振る舞いをしたり、城も大きいもの建てよう、元禄の模様はもの凄く派手で、歌舞伎が出てきて、市川團十郎が出てきて、松尾芭蕉が出てきて、というように正に昭和の大ブームで「おおきいことはいいことだ〜」みたいなCMに象徴されますが、それが江戸時代に起こりました。

元禄のあと、宝永山・富士山の大爆発、今の南海トラフ地震での大津波のような大変な天変地異が1700年代の始めに起こり、それと一緒に不景気がやって来たんです。ですから、非常に日本は元気がなくなったのですが、その時に、八代将軍・吉宗が緊縮財政を行います。何から何まで緊縮一本槍で、財政を立て直していきます。日本は時々、ワッと華やかになったあと、ギュッと締めるといことが歴史の中で繰り返されるわけです。丁度今、日本が直面しているのは、吉宗公の時と五分五分の感じです。

◇ 日本の得意技……吉宗公の緊縮政策の生み出したもの

吉宗公の時に起こった詳細は、戦国時代を經、最後に朝鮮へ17万人が出兵して10万が死んで、国土は荒廃し尽くしたところで、江戸時代が始まります。100年かけて、新田開発が進み、街道が出来て、川の堤防が全部行き渡って整った訳ですね。そして、人口も1千2、3百万人から3千万人まで増え、これで、これ以上伸びる余地が無

くなって平坦になった。そして少し下がってきた時に、吉宗公が質素儉約令で日本中をビシビシとやったんです。

しかしながら、質素儉約といえども、金のかからない娯楽だけは一生懸命奨励しました。花作り、俳句や落語、お花見、菊・朝顔の品評会、川柳の募集などなどいろんなことをやりました。現在日本が楽しんでいる娯楽の6割ぐらいは、この時に実は出来たと言われているんです。そういう形で、キンキラキンじゃない文明に、もう一度持ち直して、それで幕末まで進みます。

◇ 日本の文明が世界を救う時代へ

おそらく今私たちがやらなければならないことは、それに似たようなことですね。今、文明を変えよう、変えざるを得ないタイミングに来ていて、「歴史から見る日本と文化の再構築」ですね。今までの、お金をたくさん使えばいい、大きなものを造ればいいという文化から脱却するため、日本が変わりかけていると感じています。

そのためにも、まず日本が自国の歴史を教える国策をやらないと、日本という国がダメになる可能性が非常にあると思っています。ぜひ、皆さんそれぞれのところでですね、子ども達を集めて教育なさるようなことを進めていただきたいあとと思っています。

事例を紹介しますと、愛知県の岡崎という街は、徳川家発祥の地であります。そこで、「家康公検定」というものがあって家康公に関する問題が100問出されます。もう3、4回実施されており、老若男女が参加します。優秀者を表彰するんですが、ある年の最高年齢賞が97歳で、最低年齢賞が8歳(小2)でした。年の差が90位ありますが、同じ試験を受けて同等の点数を取られる、とても和気あいあいとした催しです。他にも、小中学校で家康公作文コンクールということもやっておりまして、お子さんにいい点を取らせたくて、休暇を利用して家族で家康公ゆかりの地を巡られる。地域の活性化にも繋がり、地元の教育長も大喜びです。

ぜひ皆様も地域と子どもたちに目を向けていただき、学校では教えてくれない歴史や文化を学ぶ機会を与えていただけたらいいあとと思っています。どうぞご清聴有り難うございました。

(紙幅により、内容を一部割愛しています。)